

第四章 「0」からの出発

三始（さんし）の空に

初めて異動先は、0（オー）中学校。初年度は、副担任だった。教師1年目は学年所属がなく、その後6年間学級担任だった私にとっては、副担任の仕事は新鮮だった。「担任の先生をフォローする」という役割は、仕事にゆとりがある反面、気持ちとしては少し寂しい感じもする複雑な心境だった。初任校での頑張りには自分の中だけにあるもので、新しい学校の同僚からすれば「新人同様」であり「0＝ゼロ」からの出発となった。

自分にとっての「0」からの出発がいくつかあった。社会科だけでなく英語の授業を持ったこと。持ち時数の関係で頼まれて、臨時免許を発行していただいたことだった。「誰かがやらなきゃいけないから」「人助けになるなら」という前向きな受け止めだけで引き受けたものの、内心は、「私に英語を教わった生徒たちは、英語力を伸ばすことができずに申し訳ない・・・」という思いだった。たが、大きなトラブルもなく、英語もできる先生としてふるまっていた。

もう一つの「0」からの出発は、卓球部の顧問になったこと。卓球の専門家がいたものの、その先生は既に野球部を主で受け持っていた関係で、卓球部の主顧問が必要だったのだ。自分自身は、「サッカーがやりたいから教師になった」というような生き方をしていたので、「私からサッカーをとったら何が残るの？」という気持ちだった。そのサッカー部には、専門家が既に顧問として活動していた。悩んだ挙句、「サッカー部の副顧問にさせていただけるなら、卓球部の主顧問を引き受けます。」という結論を導き出した。年度初めの部活動顧問会議で了承していただき、2足のワラジの生活が始まった。

この2足のワラジ生活で気づいたことは、自分にとって、とても意味あることだった。

ポイントだけ、箇条書きにしてお伝えしよう。

- ・卓球というスポーツをリスペクトするようになった。
- ・サッカー部員以上に、素直にまじめに頑張る卓球部員の姿に心を打たれた。
- ・個人戦で追い込まれたゲーム展開での大逆転を体感。メンタルのスポーツだと実感した。
- ・私自身は、卓球というスポーツについて、プレーヤーとして向いていない。
- ・専門のスポーツ以外で顧問をすることにも意義がある。
- ・専門のスポーツ以外で顧問をすることは、負担感が大きくなる。

2年とちょっと卓球と関わり、学ぶことが多かった。最初のうちは、副顧問のサッカーの練習ばかりに行って、卓球部をないがしろにしていた。そのうち、部員から「先生、顧問なんだから卓球部の練習にも来てくださいよ・・・」と言われてしまう始末。夏以降、代替わりをしてからは、卓球部に軸足を置いて活動することにした。各地の練習試合や練習会に引率したり、自費で卓球マシンを購入したりと自分自身も卓球部の指導にのめり込んでいた。

今振り返れば、自分自身が専門だと自負していたサッカー部での戦績よりも、専門外の卓球部でのほうが良かった。市総体優勝・県大会ベスト8まで行き、痺れる試合を経験できた。部員に恵まれていたことと、卓球経験者のサポートが結果につながったのだと思う。

その卓球部では、プレー以外に忘れられない出来事があった。

秋の日の放課後、卓球部の1年生が職員室に飛び込んできた。活動室のベランダの掃除をしているときに、クーラーの室外機のヘリのところに、鳥のヒナがいるのを見つけたとの訴えだった。早速見に行くと、ふわふわの羽毛に包まれたグレーのヒナ鳥がいた。こちらをジッと見ていた。どうやら鳩のヒナらしかった。教頭先生にも来ていただいた。結局、空の段ボール箱の中に入れ、様子を見ることにした。ヒナは、びっくりした様子だったが、まだよく見えてないようで、キョロキョロしただけで、直ぐにうずくまってしまった。

この日から、小鳩を世話する生活が始まった。「はまじ」という名前をつけ、段ボールは職員室の自席の脇に置いた。八百屋さんでトウモロコシを買ってきたが、まるまる3日間、警戒して全くものを食べない状態だった。「このままじゃ死んじゃうぞ」と用務員さんが「鳩のえさ」を買ってきてくれて、くちばしを無理やり開けて流し込んだ。すると、ようやく自分から口を開けて食べるようになった。「はまじ」は、私が餌をあげる時、「ぴいぴい」と鳴きながら寄ってきた。私を母親と思っていたようだった。

そこからの成長は順調だった。

しばらくすると、車通勤していた私は、退勤の際にダンボールの部屋ごと持ち帰ることにした。少しずつ飛べるようになってからは、広場に連れて行って飛び方を教えた。自分が飛べないのに、真剣になって羽ばたく様子を伝えていた。その甲斐あってか、「はまじ」は飛べるようになっていった。飛べるようになると段ボールでは落ち着かないので、運転手である私の肩に乗ったまま一緒に学校に行った。終日学校周辺で自由に過ごし、帰りには学校内の決まった場所に戻ってくるという生活が続いた。今思えば、おおらかな時代である。

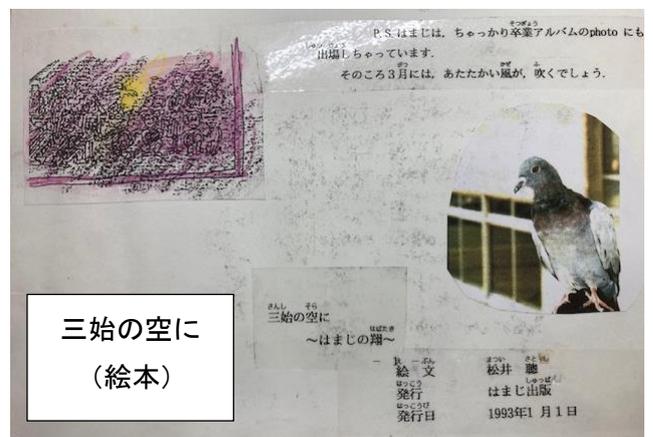
「職員室の中に鳩のヒナがいる」から「鳩が学校の中を行き来している」になり、「鳩がすっかり卒業アルバムのクラス写真に写りこんでいる」となっていった。これらの日々は、周りの方々のおおらかさがないとあり得ない話だろう。

「はまじ」は、ずっと私の傍にいた。しかし・・・

冬休みのある日、教職員仲間でスキーツアーに出かけることになった。「はまじ」のお世話は、面倒見のよい生徒に頼むことにした。「私がいなくて大丈夫かな・・・」その不安は的中し、「はまじ」は帰ってこなかった。巢立ったのだ。とてもせつない気持ちになったが、これで「はまじ」が本来の姿に戻るという安堵の気持ちもあった。頭の中に「はまじ」との日々が走馬灯のように巡っていた。

それを形にしたいと思って、絵本にしてみた。ちょうど「酉年」の正月を迎える頃だったので絵本のタイトルを「三始の空に」とした。「三始」とは、年・月・日の始まりのこと。つまり、1年の始まりの元旦の朝である。それまでは全く縁遠いことだった「絵本をかく」などの創作活動が、「0」からの出発であった〇中学校の「三始の空に」から始まった。

これは、新しい自分自身の始まりとなった。



社会科体操

「三始の空に」を前任校の同僚に紹介したところ、この物語を気に入ってくれた先生がいた。前出の「松井聰氏に贈る Y中での思い出」の記念アルバムを作ってくれた先生である。今度は、「三始の空に」を英語版にリメイクしたり、友人に紹介して道徳の教材として活用を進めてくれたりした。暫くすると、ある小学校からの実践報告と感想が届いた。「O」から新しいものを創ることが、更なる広がりにつながる可能性を感じる事となった。

この頃の私は、もう一つ「O」からの出発を始めていた。自分の社会科の授業の中でいつの間にか「社会科体操」という手法を用いるようになっていた。「社会科体操」とは、耳慣れない言葉であろう。それもそのはず。私が作った造語なのである。私の授業を受けた生徒は、みんな知っているし、数年後に道端であった教え子からも「先生、社会科体操まだ覚えていますよ!」と言われるくらい、教え子たちにとっては「なじみのある言葉」である。

社会科体操が生まれたきっかけは、「地球儀」を使って「地球の位置」を教えていたとき。北緯・南緯の読み方(0~90度)と、東経・西経の読み方(0~180度)をしっかりと理解できる生徒が少ないことに頭を悩ませていて、何とか上手に理解できる方法はないか・・・と考えていたときである。大きな地球儀を目の前に置いて、地球儀をなぞるように手を動かしながら説明した時に、生徒の理解度が各段にあがったように感じた。

「赤道中心 北緯と南緯は90度」七五調の言い回しで、とても言い易い。

「ロンドン中心 東経・西経180度」こちらも七五調ではまる。

これを続けて声に出して言う。手の振りをつけて言う。みんなで大きな声で言うことで、楽しい気分がひろがっていった。リズムカルに体を動かしながらやることで、まるで体操のような感じだった。これを直感的に「社会科体操」と命名したのだ。

次に、世界の気候を「熱帯・乾燥帯・温帯・冷帯・寒帯」と、緯度・経度のときと同じように大きな地球儀が目前にあるようなイメージでその気候帯が位置する場所を示していった。生徒たちはスムーズに理解し、楽しみながら社会科体操をしていた。

その後、「世界の山と川」を上手に覚えられるようなものを作ってみた。3つ目が定着する頃には、「社会科体操」は、私にとっての大きな存在になっていた。試行錯誤を重ねながらレパートリーを増やしていった。「社会科体操」には、不思議な力があると感じていた。みんなで一緒にやる。しかも声に出して体を動かしながらやることで、楽しさや一体感を味わうような時間になっていた。社会科の基本用語を理解するというだけでなく、友人関係を滑らかにしていったり、クラス全体の雰囲気をよくしていったりする効果があると感じていた。いつの間にか、「松井先生の社会科=社会科体操」というくらいになっていった。

この社会科体操は、「考える社会科」を標榜する教師には、全く届かない教材だった。

ただ、生徒たちには大好評だった。どのクラスでやっても楽しそうやる生徒がほとんどだったので、とにかくやり続けていた。この「自分だけのオリジナルである」=「O」から作りあげるといふという経験は、後々大きな気づきを与えてくれることになった。

右は、社会科体操を学ぶためのミニブックである。表は社会科体操の言葉で、裏は動きのイラストになっている。実際の動画があれば、もっとスナリと理解していただけると思うが、ここではイラストでご勘弁願いたい。

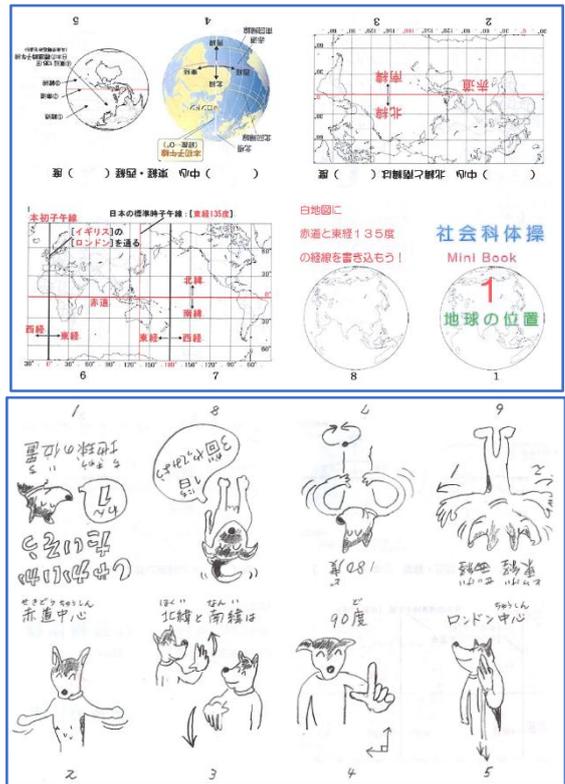
後述するが、「せせらぎ文庫」という避暑地の夏のセミナーの中で、社会科授業を担当させていただく時に「ミニ教科書」として作ったものである。データでも公開している。私の研究者HPのWorks(作品)にアクセスすると、活用できるようになっている。(現在は1~5のみ 右参照)



右のミニ冊子は、中央部分に切れ込みをいれて、8分の1サイズにして活用している。

私は、自分を紹介する場合に、折に触れてこの「社会科体操」を演示している。おそらく初めて聞いた「社会科体操」という言葉と、「楽しそうに体を動かしながら演示している私の姿」は、

その場にいる雰囲気なごませてくれた。以下は、「社会科体操」を取り上げて紹介するときのイラスト。これを見ていただきながら、参加者の皆さんに「社会科体操」を実演していただく。すると、その場の雰囲気が一気に和むのを感じる。児童生徒から教職員まで、対象が誰でも同様だった。これらの経験を経て、「社会科体操の底力」を信じている。これこそ私の持つ「最強の教材」だと思っている。



ひらき・つなぎ・つむぐ

楽しく学ぶ教材 その1



帰国後も実践を継続中

社会科体操

海外日本人学校への道

〇中学校で3年目に持ち上がりのクラスの学級担任をして、卒業生を出した。

その後は、1年生の学級担任として新しいメンバーとの再スタートとなった。そこからの3年間もドラマの連続だった。卓球部顧問を卒業してサッカー部顧問に専念してからは、サッカー部の先生という顔で過ごしていた。

中学校教師は、新入生を受け持ち、3年間かけて育てて卒業させるのが1つのサイクルとなっている。巣立っていく生徒たちの背中を見つめているときが一つの区切りである。卒業させた後は、自分が指導してきた日々を振り返りつつ、生徒の成長を実感するものである。暫くは感傷に浸っているものの、卒業時の事務作業と新入生を迎える準備（忙しさ）でまた日常に戻っていくような感覚である。

プライベートでは、〇中学校の4年目に結婚した。以前から海外生活への憧れをもっていた私にとって、結婚は「海外日本人学校へのチャレンジ」という気持ちを引き起こすこととなった。それまで生徒会顧問や特別活動主任などを経験していたものの、「学年主任」の経験はなかった。周りを見回して同期の仲間が「学年主任」を務めている様子を見ると、少し寂しい気持ちにもなっていた。「どうしたらもっと責任ある仕事ができるのだろうか・・・」そんな風に考えていたのかもしれない。その一つの答えが在外への挑戦だった。

海外派遣を経験している方々から話を伺うことで、在外教育施設派遣教員選考への準備を進めていった。派遣経験者は、皆さん輝いて見えた。自分もそれに続けたいと思い、〇中学校の5年目の4月に在外教育施設派遣教員の選考に出願した。4月に新しい校長先生をお迎えしていたが、その校長先生との出会いがとても大きかった。派遣教師の選考では、「志望理由」や「在外で頑張りたいこと」などを問われるため、事前に準備する必要があった。校長先生は、試験対策の作文の添削をしてくださった。自分の所信を表明したり、考えをまとめたりする経験がほとんどなかったために、基本中の基本から教えていただいた。

この時、校長先生が発した何気ない一言が、今も私の心の中の灯になっている。

「松井さん、あんたみたいな人は100人に一人しかいないよ。」

曖昧ではあるものの、上記のような言葉を伝えていただいたという記憶が残っている。その時のニュアンスから「否定的な言葉」ではなく「励ましの意味」であることは伝わっていた。その言葉の真意について深く伺ってみたかったが、そうしなかった。しかし、いつしかこの「100人に一人」というフレーズは、自分を奮い立たせる原動力になっていた。

校長先生のご支援もあり、在外派遣教員の選考（教育事務所→県教育委員会→文部省【当時】）に合格し、翌々年度に派遣される教員としての内定を受けた。その後は、いずれは世界の日本人学校（どこかは未定）に派遣される身であることが、自分の仕事への構え方・関わり方に変化をもたらしてくれた。目の前の仕事の全てが「海外で教える先生にとっての貴重な経験」にバージョンアップされたのだ。「もの事は、考え方・受け止め方で自分自身の実りが変わる。無駄なことは何も無い。」という感覚を実感することになった。

派遣内定者として迎えた O 中学校の6年目、持ち上がりのクラスの学級担任として期限つきの1年間が始まった。学年始め、今でも忘れられない出来事があった。

最初の学年集会。生徒たちは、中だるみの中2（ちゅうに）の姿を引きずって、ピリリとした空気感を作れずに、しまらない状態だった。その状況に業を煮やした着任して間もない先輩の先生が放った一言は、私の心に突き刺さった。

「お前ら、こんな姿だから他の学校から軽くみられるんだよ。」

「それは、お前ら生徒だけの問題じゃない。教師も悪い。」

生徒の前で教師がダメ出しを受ける・・・個人的には、前任校でサッカー部の生徒の前で叱られた経験があったが、まとまって学年の教師がダメ出しを受けたのは衝撃的だった。今振り返れば、「生徒の姿は、教師の指導力の表れ」ともとれる。しかし、その当時は、自分たちが否定されている・・・と受けとめていた。

「何を言っているんだ。本当にそうだったとしても、何も生徒の前で言う必要はないはずだ。これは、これまで奮闘してきた私たちスタッフに対してあまりにも失礼だ・・・。」と悔しい気持ちが溢れ出ていた。学年集会が終わり職員室に戻ると、その先生の姿が見えた。場所は、職員室と続きになっているピロティといわれるところ。職員の休憩場所となっているところだった。

「先生、あれはないじゃないですか。僕らもこれまで必死にやってきたのに・・・」

なんとか言葉を絞り出していた。先輩に物申すのは、少々勇気がいることだからだ。先生は、私の言葉に動揺一つせずこう切り返してきた。

「さとしくん。君は、来ると思ったよ。」

そう言って、しばらく沈黙があった。私は、その言葉の意味を考えていた。

「これから一緒に良い学年にしていこうよ。力を合わせてね・・・。」

全く予想していない言葉だった。もう感情がぐちゃぐちゃになっていた。その先のことは、よく覚えていないが、その言葉を受け入れて引き下がったのだと記憶している。生徒や教師に辛辣な言葉を発した先生自身は、その言葉を背負って生活していた。先生にとっても十分な覚悟の上での言葉だったのだ。生徒たちは、「反発」よりも「従順」だった。「この先生についていったら道が開けるかも」と生徒なりに新しい風を感じていたのかもしれない。

その先生は、進路指導主任として、常に生徒たちが歩くべき道を示し続けてくれた。私自身も、自分が持っていない進路指導のノウハウを提示してくれる先生の存在に救われていた。生徒たちは、「進路＝高校進学」という目の前の目標を見つめて、それぞれに頑張るようになっていた。平和な日常が続いていった。

生徒の姿が良くなっていくと、その先生は折に触れて生徒をほめていた。しかし、また直ぐに檄が飛ぶ。すると生徒の姿が整う。そんなやりとりを繰り返しながら、スパイラルは、確実に上向きになっていった。その先生の生徒との距離感の取り方は、自分にマネできるものではなかったが、その違いを受け入れている自分がいた。「まんまと先生の術中にハマったのかも・・・。これが経験の差だ。」と感じながらも、出来る限りノウハウを学びたいと思う自分がいた。振り返ると、学年・学校を立て直していく時には、時には劇薬とも思える手法もあり得るのかもしれない・・・という一つの体験になった。

海外派遣の直前に、当時の市川市長より賞をいただいた。

「学芸指導者賞」・・・聞きなれない賞であった。

表彰対象となった活動は、「生徒会活動の活性化」で、市長室で市長さんから直接拝受した。市内の教職員で、指導者として顕著な成果をあげた先生を表彰するものだった。私以外は音楽・運動の部活動の指導者だった。私が担当した「生徒会活動の指導＝生徒会顧問」は校内の生徒を対象にした活動だ。他の方々のように対外試合やコンクールにおいて顕著な成績を残したわけではい。それゆえ、市の代表として評価していただいたのは、校内の活動の爽りを感じた校長先生の強い推薦があったからであると思っていた。もちろん、この点も「どうして私なのですか？」と軽く聞いた後は、有難く受け取ることで、自分の自信に変えていった。

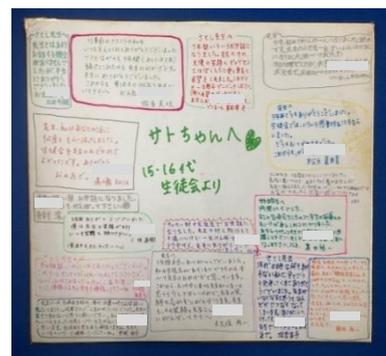


その生徒会活動では、もう一つの宝物がある。

38年間の教師人生では30枚以上の色紙をもらっているが、「生徒会より」のタイトルでもらったのは、この時だけである。その色紙のメッセージには、若き日の私の熱量の大きさが示されている。

行事前のフラフラの私をいつも支えてくれてありがとうございました。ツライながらも3年間続けてこられたのは、先生のおかげです。本当にありがとうございました。これからも男泣きの似合う先生でいてください。お元気で。(K)

先生、私はあなたの涙に何度ももらい泣きしました。生徒会を先生の前でやれてよかったです。ありがとうございました。お元気で。(T)



生徒会担当者として、たくさんの涙を流していた。父の最後の涙に触れて、「涙は、最高の言葉である」(第一章参照)と気づく前のことである。この時は、これらのメッセージを書いてくれた生徒の弟や妹に会うことになるとは、思ってもいなかった。(第六章参照)

私自身は、小1～高2までずっと学級委員長だった。立候補したことは一度もない。なぜかそうになっていた。高3は、さすがに最後くらいは勘弁してほしいと頑なに断ったが、結局全校の評議委員長のような役割が回ってきた。中学校時代、1年夏に会計として生徒会本部役員を務めた私は、翌年度の夏に担当の先生に生徒会長になってくれないかと打診されたことがある。少し悩んだが、自分のやりたいこと(サッカー部の部長)を全うしたいからという理由で断った。一度断ったら、サッカー部の顧問の先生を連れてきて説得された。仕方がなく泣いて断った。この時の涙も、今思えば「言葉」だった。苦い思い出である。その決断の後、「この選択を絶対後悔したくない」という思いで生活していた。「生徒会長を断った涙」や「教師として流した涙」は、感謝につながった3つの涙(第一章)に通じる涙である。